

[[この小さくて赤い毛むくじらの生き物はなに?]]

出勤してきた社長の第一声は、甘い猫なで声とは裏腹にメッシュ通信網から滴り落ちるかのような毒気をただよわせていた。二十名からの社員たちが一斉に振り返る。

アルアミラルは事務所の給湯室から顔を出すのを一拍遅らせることにした。

彼は、合成ミルクのボトルを冷蔵庫に戻すと、コーヒーをブラックのまま一口飲み、深呼吸をしてからできるだけほがらかに口頭の挨拶を返した。

「おはようございます、社長。それは子犬です」

シャロン=孫は事務所の入り口付近でデータパッドを両手に抱え、ひどく的はずれな誕生日プレゼントを受けとった娘のような笑顔で、給湯室から出てきた彼を迎えた。目は笑っていない。

「推定生後一ヶ月の子犬です。詳しく検査しないと犬種は特定できませんが、特徴から推測するに、ボーダーコリーとイングリッシュ・フックスハウンドとの混血種と思われます」

「すてき。由緒正しき雑種犬というわけね。おいしいあ、アルアミラル。あたしが訊いているのは、何故このオフィスに生きた犬がいるのかという点。そのうえまさか検疫済みかどうか心配しなくてもいいわよね?と、はっきりと、ひどく懇懇に口頭で発音した。声はいつそう甘ったるい。

「拾ったのです。マレ湖畔鉾山のエリア七一三付近。メッシュ通信で報告したと記憶しています。もちろん検疫は済ませました」

「マレ湖畔鉾山? 襲撃作戦中に? 生の子犬を拾った? え〜と、確かにあなた、犬がどうか。あたしはてっきり研究施設の保安部隊のことかと思っただ」

それから彼女は、部屋の中央に視線をうつし、しっぽを振っている小動物から距離をとりながら事務所の壁際を自分のデスク目指してそろそろと移動し始めた。

なんとか目的地にたどりついた彼女は、デスクの上に両手一杯のパッドをどざりと積み上げた。

「居住フロアの下にある区域でした。三度目の爆発のあと階層がまるごと崩落



後日談...

DOG TALE

犬の話

する危険性が生じたよね。それで緊急撤収命令が出た。わたしは脱出路を探していた。そのとき見つけたのです。壊れた飼育用ケージが数個転がっていて、周辺に成犬の死体がありました。それと子犬たちの死体。きっと爆発に巻き込まれたのでしょう。こいつは生き残りです」

アルアミラルの説明にシャロンは小首を傾げた。

「ということは、その子犬は愛玩専用じゃなくて中華料理向けの違法高級食材もしくは生体実験のサンプルとして飼われていた可能性が高いね。」

「かもしれません。でも、子犬は子犬です」

無造作に置かれたパッドの山が、バラバラと床にこぼれ落ちる。

「崩落と子犬。ぐずぐずしてたのはそれが理由なのね」

「ええ、まあ」

シャロンは椅子にふかふかと腰掛け、両手の指を合わせながら冷徹に宣言する。

「ここでは飼えないよ。ダメ」

「わたしはまだなんにも」

「ダメといったら、絶対ダメ」

アルアミラルはため息をつきながら、床のパッドをひろい集めた。

「第一、このタイタンで生の哺乳動物と暮らすには面倒な手続きが必要な。市の衛生課の長つたらしい名前の三つの係りに申請書を出して、四十二項目からなる八枚の許可証と誓約書にサインしなくちゃならない。それから別の部局で、飼い主、おっと、じゃなくて包括

的人権法的には『パートナー』だね、その適性試験をパスしなくちゃねえ。試験に合格しても1ヶ月の実地講習を受けなきゃいけない。準知的生命体と同居する心構えを確認するためよ。まだ〜まだ〜あるわ。その子犬さん、

低重力対応の脳手術受けてないでしょう。それに半年に一回、対象が健康に暮らしているかどうか観察員が家庭訪問にやってくる。それからそれから各種ワクチンの定期摂取義務などなど、フーツ」

シャロンは腰掛けたまま、人差し指を立てながらよどみなく説明をつづけた。

「それに、ここ肝心。イスラムでは犬は不浄の存在。ムスリムは犬を飼わない」

アルアミラルはだまって聞いていた。彼女と目を合わせていると、時々その目がホンのかすかだが焦点を失うことに

仲知喜 & 蔵原 大

気づく。メッシュ通信でネットライブラリに接続し、素早く情報検索しながらしゃべっているのだ。諜報戦のプロらしいちょっとした離れ技だが、いまは感心する気にはなれなかった。

犬の飼育について彼なりに調査済みだった。イスラム教徒が犬を不浄とすることも学んだ。時間をかけてクルアーンをひも解き、動物に関する条項を探しあてたのだ。アレクサンドル=アルアミラルはほやほやのイスラム教徒だが、イスラムの経典をドキュメントとしてまるごと脳にダウンロードする本質の無意味さを拒んだ。そもそも信仰は誓約の問題であり、ダウンロードで即製できるようなものではない。だから、今もってクルアーンは学びの途中。

幸い、イスラム教徒が犬を飼うことはとうの昔に禁忌ではなくなっていた。技術的特異点以来、あらゆる伝統的な宗教組織が経典の再解釈を迫られていた。そうしてアッラーの教えは進化しながら生き続ける。はるか昔より、とはいえアッラーから見れば一瞬も同然なのだが。

シャロンが心もち声を和らげた。「ねえ、悪いことは言わない。興味を持ってくれそうな動物愛護団体にでも預けたらどう？ 手厚く保護してくれると思うよ。でもどうして、よりによって生きた子犬さんなの？ ヴァーチャル・ペットやクリーピーじゃダメなの？」

アルアミラルは返す言葉に迷った。なんといえはいいのだろう。小爆発の続くステーションの胸の悪くなるような振動のなかで、機械油のシミだらけのフロアに親犬のはみだした内臓と周囲にころがる子犬の死体を目にしたときのことを。それはまるで感傷のすぎる生命のオブジェだった。部屋の奥から聞こえてくる甲高く弱々しげな鳴き声。そっと生きた毛玉を持ちあげたとときグローブ越しに伝わった柔らかい手触り。フラックジャケットの胸を開き子犬を押し込んだときのその体温と、マスク内に充満した生の生物の異臭のことを。

思いに反する言葉が出た、「シャロン、あなたのことを考えたのです。あなたは普通の友達があまりいらっしゃらないでしょう。せめて犬でもお飼いなればと思います。まさか犬がお嫌いだとは思っていませんでした」

と話しつつ取り繕うように笑みを浮かべてみたが、社長の瞳が大きく見開かれ、顔がみるみる赤くなっていくのを目の当たりにして、アルアミラルは自分の致命的な戦術ミスさをさとしたのだ。

そのあと結局、二時間近く続いた次期作戦のブリーフィングでは、孫社長は終始ムスッとしたまま説明も最小限に、傍目からも明らかにどす黒いオーラを放っていた。アルアミラルに話を振る時も、普段と打って変わって「実動部長さん」とそつなく役職名で呼ぶ始末。あんまりにもひどかったので、コーヒーブレイクの間、ニャン経理部長がたしなめの意を暗に含ませながら尋ねてみたそうだ。しかし返ってきたのは一言、「バカアルがあたりをいじめる」とのこと。

やれやれ、背丈も堪忍袋も噂どりの「ショートショート」というわけだ。しかし彼が子犬を抱いて参加したことが、乙女の怒りの炎に燃料を注いだのかもしれない。やがて解散となり、おろされた子犬はしばらく辺りを嗅ぎまわっていたが、やがて社長室のガラスドアの前で丸くなった。なぜよりによって、そこなんだ？

オフィスは静寂に包まれていた。社員たちは珍しく出払い、たまたま事務所には二人きり。

アルアミラルはイスに腰掛けながら、作成途中の報告書のことを考えた。棚からSSS社のハードコピーされたパンフをとりだしてほんやり読んでみると、ゆっくりとドアが開いた。ドアに押されて子犬が床をすべり、天変地異に仰天して部屋の隅まで逃げ出す。その後から出てきたの

は、ご機嫌をとるようにぎこちない微笑みを浮かべ、後ろ手に組んだ小柄な女の子。

「すみませんでした。あんなことを言うべきじゃなかった」

先に謝ったのはアルアミラルだった。

言葉のダブったシャロンは暫く彼を見つめ、首を傾けてガラス張りの部屋に入るよう促す。相手が入室すると、深呼吸をして腰に手をあて、論すような口調でいった。

「お願い、少佐殿。こんなこと、ムスリムに説法だけけど、あたしたちの立場を忘れないでね。あなたが所属している我が社は傭兵でもボランティア団体でも、ましてやあなたが前にいたロシア軍でもない。自治主義派同盟の特別機動部隊として秘密任務を遂行しながら、同時に災害復興支援や人権保護活動に尽力するという、ヤヌスの顔を備えた民間軍事会社なの」

アルアミラルはうなずく。それは彼女に勧誘された一年前に釘を刺されたことだった。

「もちろん、あなたも重々承知だとは思いつけど、アレクサンドル=アルアミラル。無力な動物を助けたいっていう気持ち、それは立派だと思う。でもね、アーチャー五六鉱山の労働ストライキは主要メンバーが全員不慮の事故死にあって頓挫した。ニューケベックではこの数ヶ月で育成中の特注モーフ十六体が行方不明になってる。昨晩は、天声派を名乗る新興宗教団体がエンジンの取り除かれた廃棄宇宙船のなかで集団自殺を遂げ、八分前にはすぐ近くにあるボディバンク会社のロビーで誰かさんが銃を乱射した。木星共和国とタイタン政府との話し合いは、センチュリオン事件以来、相変わらずの平行線。そして建前上は中立のはずのハイパーコープは両陣営に取り入り、恥知らずにもヴァレンタインの住民の即時立ち退きを認めさせた。わたしたちが関係していたか、関心を寄せている事件は軽く一〇〇を超える。そしてやるべきことは山積みで、慎重に取り組まないとあっさり崩れ落ちる危ういバランスにある。だから子犬をかまっているヒマなんてないの。こんなこと認めるの本当はイヤだけども。本当に残念。だけけどQED」

「お言葉ですがシャロン=孫大尉殿。では、責任はどこにあるのでしょうか。社会正義の理念は理解しています。任務ならば命を捨てる覚悟で。しかし、責任は？」

アルアミラルはそういって、相手の目をみつめた。今の少女の瞳は焦点を失うことなく真っ直ぐに見つめ返している。微かに輝きながら。

「銃を撃つだけ撃つとあとは野となれ山となれですか。殺すだけ殺して。マレ湖畔鉱山の襲撃はダイレクト・アクションが仕組んだものだ。だが偶発事故に見せかけた爆破工作は我々の秘密計画だった。たしかにこれでエコロジーンがダミー会社を通じて仕掛けた大規模な遺伝子操作計画は破綻するでしょう。タイタン市民の頭上にレトロウイルスを散布しようにも、ここまで大ごとになれば、買収された政府高官としても看過できないはず。いえいえ、あえて隠蔽工作任務を担われた社長を批判しているわけではありませんよ。それで救われる命もあります。爆破から脱出までの猶予を考え、戦闘及び非戦闘員の生存者数は四割を見込めるという計算でした。実際は八割が脱出したのですから作戦は大成功です。しかし残りの二割の命はどうなるのです？

エコロジーンの研究員、キャッスルの保安員、ダイレクト・アクションの傭兵、それに我らが同朋。尊い犠牲ですか？ お互い覚悟のあった身ですか？ そうかもしれません。しかし、この子犬のような誰も気にかけない命が失われた時、いったい誰が責任を取るのでしょうか」

「你不对!……ちよつとアル、何言ってるの。作戦計画にはあなたも関わったくせに。それにあ、あたしがいつ殺すだけ殺したっていうの! じ、じ、人類であれ非人類であれ生命を軽視するなんて兵法の最も忌むところよ! ふ、ふ、ふざけるな! そ、そ、孫子曰く『兵は国の大事、死生の地、存亡の……』

「どうか最後まで聞いてください。たしかに世のなかには、医療・経済・宗教それぞれケアのプロフェッショナルが存在します。あなたがおっしゃる、しかるべきところに子犬を預けろという、その言葉はまっとうなご意見だと思います。だが、それと、いま目の前で助けを求めている命に寄り添うことは、別のことだと感じるのです。気づいてしまっているながらよその誰かが上手く片付けてくれるだろうと目をそむけると、覚悟を決めて手を差し出すことは、似て非なるものです。だからこそ我々が存在するのではありませんか、社長」

子犬はよたよた這い出していた。いつの間にか二人のあいだに座り、交互に顔を見上げて甘えるように鳴く。それからあくびをし、今度はアルミラルの足元でまた丸くなる。シャロンは深いため息をつき、足元の小さな命をしばらく眺めていた。

「そうか。そうだね。覚悟を決めて、か。もう手、差し出しちゃったんだよね」

それから目をゴシゴシすると、観念した様子ながら、涙声で説得モードに入った。

「子犬はごはんを食べるの。食後には散歩しなくちゃならない。時々具合が悪くなるし、病気になるよと吐くよ。何かにとりつかれたように靴に噛みついてはバラバラに引きちぎる。そこらじゅうに抜け毛をまきちらす。暗くなるとむやみに咆える。ところかまわず、おしっこをする。あまつさえ、犬のウンチは鼻が曲がるほど臭いのよ。覚悟ある?」

「イエス、サー」

「それにね、親を失う幼児はこれが最初ではないし最後でもない。孫子曰く『愛民は煩わさるべきなり』っていう意味、考えておいてね」

「肝に銘じます。子犬のしつけはするつもりです。昼は事務所で世話をしましょう。夜はわたしが自宅に連れ帰ります。ありがとうございます。シャロン、犬はお嫌いじゃなかったのですね」

彼女は鼻水が垂れるのもぬぐわず、つんと口を尖らせた。「犬が嫌いなんて何時言ったかなあ。それに、おかげさまで友だちも大勢います」

アルミラルが手を伸ばして耳の後ろを搔いてやると、子犬は身体をよじらせて短い牙をむき、彼の手に甘く噛みついた。

「それでね、アレックス。あと一点問題がありまして……その、あなたはもう知っているかもしれないけど、食用犬の身体寿命は長くてもね、一……地球年なんだって。新陳代謝の問題でね。インプラント処置で代謝を遅くすれば多少は延びる……って話だけど」

「そうでしたか」

アルミラルが顔をあげた。

「よければ、一緒に彼女の名前を考えてくれませんか」

「ええ、よろこんで。でもその子、女の子だったのね」

「最初に言いましたよ」

「それ初耳。そうよね、ワンちゃん♪」

小さい赤い毛むくじらの生き物はびよこんと跳ね起きるとシャロンとアルミラルの中間のあいまいな位置に目を向け、身を強張らせた。床上に金色の水たまりが広がった。

用語集

『Eclipse Phase』はサイエンス・フィクションを題材としたゲームであり、さらに“ハード・サイエンス”志向を明言した作品でもあります。従って、『Eclipse Phase』では多くの天文学や情報工学を中心とした科学用語、また数多くのコンセプトを短く象徴するために作成された独自のジャーゴン（特殊用語）が使用されています。

『Eclipse Phase』の世界観を土台とした本書でも、多くのそれらが利用されています。この用語集は、読者が『Eclipse Phase』の様々な色が無数に混ざり合った多様な世界で迷子にならないよう、そしてその魅力的な世界を理解する一助となるよう設けられたものです。なお、一部には本書に収録された作品の著者が創造した言葉もあります、その点には留意してください。

■用語

■イシイヨネオ（石井米雄）

実在の東南アジア研究者（1929～2010年）で、2008年に瑞宝重光賞を授与される。

■インフォモーフ（情報体）

物理的身体のない人格データのみの「トランスヒューマン」を指す。別称「インフォ」とも。

■インプラント

義体の内部に埋め込まれた電子工学系や遺伝子工学系の各種機器等の総称。機械義体の場合は外付けのものも含まれる。

■失われた世代（ロスト・ジェネレーション）

“大破壊”直後に、強制発育手段によって育てられた一世代の子供たちのこと。プロジェクトは失敗し、多くの者が死ぬか発狂した。

■エコロジーン

「ハイパーコープ」の一つで、生体科学に関する産業における大手企業。

■エルヴィン＝ロンメル

実在のドイツ軍人（1891～1944年）で、別名「砂漠のキツネ」。第二次世界大戦で活躍した。

■技術的特異点（シンギュラリティ）

飛躍的な技術進歩によって社会発展がかつての予想を上回るほどに加速するという概念。

■軌道エレベーター

地表から衛星軌道にまで伸びるチューブ状の建造物。地表と宇宙との物流を、ロケット等に比べて格段に安いコストで可能とする。

■クルアーン

イスラム教の聖なる経典。別称「コーラン」とも。

■クレジット

エクリプス・フェイズ世界での金銭は、絶対的規準としての共通貨幣である「クレジット」と、公的業績に応じた相対的権力としての社会的評価「評判」（REP）の二本立てになっている。

■SMG（サブマシンガン）

小型の機関銃で、別称は「自動小銃」「短機関銃」とも。

■自治主義派同盟

惑星連合などの大国に対抗するために結成された星間同盟で、主な活動拠点は太陽系の外圏（土星軌道とその外側）。「タイタン連邦」や無政府主義者などで構成されている。

■社会的評価

人々から集めた尊敬を、経済的価値として解釈した
もの。個人や組織に対して積極的に貢献し、影響を
与えることで増やすことができ、反社会的な行動に
よって減少する。

■射撃解析値

実在の技術用語で、攻撃時に命中を可能とするデー
タ（標的の位置やスピード等）を指す。

■スペック

昆虫大の小型ロボット。

■孫子

実在したと思われる古代中国の将軍（本名は「孫武」
で、紀元前5世紀頃?の人）、または彼が編集したと
される兵法書を指す。

■タイタン自治大学

太陽系最大級の学術機関で、留学生や他大学の学
生を含めて約百万人の研究者・学生を擁する。

■タイタン

土星を巡る衛星で、富裕な技術社会主義国家「タイ
タン連邦」の本拠地。

■タイタン保安局

タイタンには徴兵制によって編成された軍隊と保安部
隊（military and security forces）が存在する。

■タイタン連邦

土星の衛星タイタンに拠点を構える技術社会主義国で、
21世紀北欧の民主主義国家をモデルに建国された。

■地球年

24時間×365地球日の時間単位で、地球の公転周
期でもある。

■^{ザ・フォール}大破壊

技術的特異点を迎えたAI「ティターンズ」の反乱に
よって地球人口の9割が死滅し、トランスヒューマ
ンを滅亡の危機に追いやられた大戦争のこと。現在
はAF（After Fall）10年。

■「知性化」オランウータン

エクリプス・フェイス世界では、類人猿（オランウー
タン、チンパンジー、ゴリラ等）もまた「トランスヒュー
マン」の一員として社会生活を営んでいる。

■ティターンズ

地球文明を滅ぼした人工知性体の総称で、正式
名称は「総合情報戦術認識ネットワーク」（Total
Information Tactical Awareness Networks）
という。

■徹甲榴弾

標的に命中すると数千度のガスを噴出して相手を溶
かしながら破壊する弾丸。

■テラフォーミング

非地球的環境の惑星を地球に似た環境に変える事業。

■トランスヒューマン

遺伝子操作、外科手術、身体の機械化などのハイテ
ク処置によって機能が向上した人間の総称。

■ニューケベック

「タイタン連邦」の都市の一つ。

■脳内コンピュータ

エクリプス・フェイス世界の一般市民は、情報処理
／通信／記録／娯楽などのため、脳内に小型コン
ピュータを装備している。

■ハイパーコープ

エクリプス・フェイス世界における巨大企業の総
称。

■バックアップ・サービス

人格データ（いわゆる魂）を保存する公共サービ
スで、危険な仕事に従事する職業の間では特に流行っ
ている。

■^{ス・メム・ク}大脳皮質記憶装置

エクリプス・フェイス世界の一般市民は、事故など
に備えて人格データのバックアップを脳内の人工記
憶媒体こと「皮質記憶装置」に保存している。

■ファイアウォール

「トランスヒューマン」を「絶滅リスク」から救済
するために暗躍する秘密結社のこと。「惑星連合」
を始めとする多くの公的機関から危険視されてい
る。

■兵站

実在の専門用語で、軍隊の移動と支援に関する計画
および実施。別称は「物流」とも。

■ボディード

「インフォモーフ」から見た非「インフォモーフ」（つ
まり物理的の身体を有する）生命体の総称。

■マレ湖

21世紀現在のタイタン北極付近にある地名。湖と
いってもそこに湛えられているのは液体メタン等と
推定されている。

■ミュージ（支援AI）

エクリプス・フェイス世界の一般市民は、自らの「脳
内コンピュータ」に個人用の人工知性プログラムこと
「ミュージ」を備えている。

■民間軍事会社（PMSC）

21世紀地球にも多数存在する、軍隊と企業体の合
いの子法人団体。ヨーロッパ中近世の傭兵や海賊
に近い。

■ムスリム

イスラム教を信奉する人々の総称。別称「イスラム
教徒」とも。

■レーザー通信

集束したマイクロ電磁波を利用した通信機器。盗聴
が困難で、かつレーザーに比べて目立ちにくいとい
う特徴がある。

■メッシュ

高度に発達したデジタル情報網またはそれを経由す
る通信を指す。21世紀のインターネットの後裔。

■盲弾

実在の技術用語で、標的に命中しても被害が及ばず
突き抜けてしまう弾丸。

■モーフ（義体）

「トランスヒューマン」の身体の総称。

■木星共和国

木星圏を拠点とする軍事独裁国家。孤立主義・反技
術主義を掲げ、「トランスヒューマン」の存在そのも
のに否定的である。

■惑星連合

各種ハイパーコープ等が共通の利害の元に寄り集
まった連合体で、月や火星、地球等の内惑星圏を
共同管理している。オンライン投票に基づいたサイ
バー民主主義による統治を表向きの看板にしてい
る。



図像に関するクレジット

本書で利用しているイラストは以下の通り。『Eclipse Phase Core Rule』 及び『Sunward The Inner System: A Location Sourcebook for Eclipse Phase』は Post Human Studio LLC よりクリエイティブ・コモンズ・ライセンス「表示 - 非営利 - 継承」ライセンスのもと出版されている。

p5 (この頁) 背景: Zachary Graves
ベースグラフィックデザイン: Adam Jury
レイアウト: 八重樫 尚史

図像に関するクレジットの例外

以下の画像の使用に関してはクリエイティブ・コモンズ・ライセンスに則って管理されているものではありません。図像の無断複写・転載は禁止します。

各小説のタイトル図像: スtockフォトサービス『iStockphoto』の写真を使用し、その使用許諾のもと八重樫尚史が加工して作成したものです。もとの写真の著作権は原作者に、加工後の図像の著作権は八重樫尚史個人に帰属します。



クリエイティブ・コモンズ・ライセンス:
「表示 - 非営利 - 継承」 3.0 Unported
Eclipse Phase は、Posthuman
Studios LLC の登録商標です。